

P1-10.**粘液型脂肪肉腫の原因遺伝子 TLS/CHOP により発現制御される miRNA の解析**

(分子病理学)

○那 日蘇、大野慎一郎、田中 正視
 呉 偉紅、鈴木理英子、藤田 浩司
 高梨 正勝、黒田 雅彦

TLS/CHOP 遺伝子は粘液型脂肪肉腫の原因遺伝子と考えられている。この遺伝子は脂肪分化や細胞増殖抑制に関与することが報告されている。しかし、TLS/CHOP 遺伝子の下流の遺伝子発現については不明のままである。近年、miRNA による腫瘍発生機構の解明が注目されているが、粘液型脂肪肉腫の発症に関与する miRNA については未解明である。miRNA は、細胞増殖、分化、アポトーシスなどの生理的作用に重要な役割を果たしていることが知られている。また、癌との関連は、癌遺伝子の発現を抑制することにより癌抑制遺伝子のように働く miRNA も多数同定され、miRNA のプロファイリングを用いた早期癌への診断、新規分子標的治療法の確立が期待されている。このような背景から本研究では、粘液型脂肪肉腫の原因遺伝子 TLS/CHOP により誘導される miRNA の単離を目的とし、マイクロアレイ法を用いて解析した。結果から TLS/CHOP 遺伝子により発現が制御される miRNA の単離に成功した。この miRNA を粘液型脂肪肉腫の細胞株に導入すると、対照群と比べて細胞の増殖を抑制した。研究結果から TLS/CHOP 遺伝子の下流にある miRNA は粘液型脂肪肉腫の診断および治療に応用出来る可能性が示された。

P1-11.**総合診療科・熱帯感染症外来の現状と展望**

(渡航者医療センター)

○水野 泰孝、福島 慎二、濱田 篤郎
 (総合診療科)
 原田 芳巳、平山 陽示、大滝 純司
 (感染制御部)
 松本 哲哉

【背景】 海外渡航者の増加に加え、熱帯地域を中心

とした開発途上国への長期滞在や、高齢者、小児の渡航、国際結婚後の帰省等、渡航形態の多種多様化により、国内には発症のない輸入感染症患者の診療機会が増えることが予想される。このような背景を踏まえ、平成22年9月に、東京医科大学病院は国内として初めての海外渡航者専門診療科である「渡航者医療センター」を開設した。さらに、総合診療科と連携して海外から帰国後に健康上の問題がある患者を対象に専門外来(熱帯感染症外来)を設立し、診療を行っている。今回我々は、同外来の現状を報告し、今後の展望について提言したい。

【対象と方法】 平成22年9月から平成23年3月までの間に、総合診療科専門外来である熱帯感染症外来を受診した患者を対象に、年齢、性別、渡航先、渡航目的、主訴、臨床診断名等を解析した。

【結果】 患者数は34名(男性15名、女性19名)で、平均年齢は35.7±9.6歳であった。主な渡航先はアジア地域23名、アフリカ地域8名、中南米地域2名、欧州地域1名であった。主な渡航目的は就労18名、余暇11名で滞在期間は4日から2年半まで多岐にわたっていた。主な初診時の症状は発熱11例、消化器系9例、動物咬傷6例、呼吸器系4例、皮膚系3例であり、頻度が高かった臨床診断名は急性腸炎9例(病原体検出例2例)、動物咬傷6例、インフルエンザ2例であった。また入院が3例あり、バングラデシュ帰国後のパラチフスAが1例とパキスタンおよびベトナム帰国後のデング熱2例(1例は診断後転院)であった。

【結論】 我が国では、海外渡航者の渡航前から帰国後までの包括的な医療サービスが提供可能な医療機関はきわめて少なく、東日本の大学病院では当院のみである。今後は大学病院の使命である診療、教育、研究を推進し、さらに渡航医学・熱帯医学領域における診療内容の充実を目指したい。